2017 12/26
No.2057
毎月第2・第4火曜日発行

政経かながわ

一般社団法人
—神奈川政経懇話会—

赤い電車で知られる京浜急行電鉄で、塗装途中の「白い京急電車」が12月14日、県内を走った。新造車「新1000形（17次車）」の試運転。

神奈川新聞社

政経かながわ

2017 12/26 No.2057

contents

視点・点描 3
「トクサイ」悪用して不正

まつりごと点描 4
分裂民進、険しい再建
立憲民主は独自路線

経　済 6
大規模緩和策を粘り強く継続
日銀総裁、物価目標には「距離」

企業最前線 8
食中毒対策製品の開発に拍車
ノロウイルス検出を短時間化

くらし2017 10
おたふくかぜ、難聴のリスクも知って

広告珍談 12
広告はたのしい㊹
芸術ではない―絵看板とは

NNAアジア経済リポート 13

神奈川景気データファイル 14

神奈川景気データファイル 15

事務局だより

◇2018年1月定例講演会
2018年1月22日（月）
午後1時30分～3時
横浜ベイシェラトンホテル＆タワーズ5階「柏」
講師は東京大学名誉教授、時事放談キャスターの御厨貴さん
演題は「明治150年後、平成30年後の政治を展望する」

視点点描

「トクサイ」悪用して不正

今年後半、国内の製造業で品質管理に関する不祥事が相次ぎ発覚した。日産自動車の無資格審査を皮切りに、神戸製鋼、三菱マテリアルや東レの子会社では検査データの改ざん。「ものづくり日本」の信頼失墜が懸念されるが、素材メーカーの不正の背景には「トクサイ（特別採用）」と呼ばれる商慣行の存在が指摘されている。

素材メーカーの不正は、10月に神戸製鋼が自動車や航空機などに使われている製品の一部について、強度などを示す検査証明書のデータを書き換えて出荷していたことが判明。その後、三菱マテリアルと東レも子会社が製品の検査データを改ざんして出荷していたことを明らかにした。

相次ぐ不祥事を受け、経団連の榊原定征会長は約1360の会員企業に自社製品の品質に不正がないかどうか点検を呼び掛け、問題があった場合は再発防止などを講じるよう求める方針を明らかにした。出身企業である東レの不正については「自分のお膝元でこうした事態が発生したことを重く受け止めている」と陳謝した。

トクサイは不適格製品の取り扱いの手法。国内の素材・部品業界では一般的な商慣行とされ、取引先が求める規格から外れても、価格を割り引くなどして取引先が了承すれば出荷できる。

東レ子会社の担当者は「トクサイの範囲内」と勝手に判断し、取引先に説明せず黙って出荷した。三菱マテリアルの子会社も「顧客からクレームがなければ問題ない」として、規格外の不正品を正規品として出荷していたという。

このような不正がはびこる根底には、世界水準の製品をつくってきたという素材メーカー側のおごりがある。素材製品は安全面などを考慮して厳しめの基準となっているのが一般的とされている。神戸製鋼の場合、データを改ざんした製品は200社の企業で採用されていたが、取引先から表だった批判はほとんど聞こえてこない。東レの目覚昭広社長は会見で神戸製鋼の改ざんが発覚しなければ公表しなかったとの考えを示しており、問題意識は薄い。

だが、グローバル化が進む中で、このようなあいまいな商慣習は通用しない。取引の透明化は最優先すべき課題である。相次ぐ不祥事は日本の製造業に対する国際的な信用、国民からの信頼にも影響しかねない。徹底した再発防止策を求めたい。

（神奈川新聞社経済部長　佐藤　浩幸）

広告珍談　広告はたのしい㊹

芸術ではない――絵看板とは

宮野　力哉

江戸時代、見世物や芝居のハイライトを絵でアピールした。こんなにすごいゾ、こんなに恐ろしいゾと、いささかオーバーに表現して人びとを誘いこんだ。視覚に訴求する媒体、それを絵看板といった。

文明開化になって男性に洋服が普及してきても、女性の装いはきものすがたであった。新しく流行する図柄はこんな傾向だと伝えるのに、絵看板は最適であった。百貨店に飛躍しようとする呉服店は、画家たちにその制作をゆだねた。

図①は1899（明治32）年、東京は新橋駅と上野駅、大阪は梅田駅の待合室に、この大きな美人画がかざられた。モデルは新橋の名妓・小ふみ、描いたのは日本画家・島崎柳塢（りゅう）。人の背丈ほどもある額縁、両側に東京と大阪の「三井呉服店」。これ以上の説明は必要なかった。

図②。サクラの花見をする妙齢の女性たち。明治期の洋画家・岡田三郎助が1908（明治41）年に描いた、タテ2メートル、ヨコ3メートルの大きな油絵。「美人観桜図」と題されて、大阪梅田駅に飾られた。

三越のライバルは、近くにある白木屋。洋画家・山本芳翠（ほうすい）に委嘱した、大きな美人画を大阪駅にかかげた。

いずれも印刷ではなく、手描きである。絵画をそのまま看板として掲出した。画家にとって大画面で制作できる機会であり、公衆の場に発表できるチャンスでもあった。

図③は特殊な染織技法、ビロード友禅で制作された。モデルは聡明な女性として知られた、歌人・九条武子。そのころ流行したヘアスタイルのマーガレット。明治40年代、京都駅の待合室にかかげられた。世界各国で開催される万国博に、ビロード友禅を出品。受賞をかさねる高島屋が、国内にアピールする絵看板である。

大正時代になった。夏目漱石はこんな手紙を書いた。

「実は私も友輔さんで居らっしゃるか否かに半信半疑で居りました」。ある人が、「柳塢さんは友さんの事だと教えて呉れました」。宛先は図①の作者、島崎柳塢。市ヶ谷学校での幼な友だちで、漱石が金之助であるように、柳塢は友輔が本名であった。長年たがいに接触はなかったが、柳塢から漱石に手紙がとどいたという。柳塢は文展でたびたび受賞。新聞に文展評を記した漱石は、柳塢の作品を気にとめていたのだろう。絵看板にある、ほのぼのとした逸話である。

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）

図①、図②＝いずれも三越資料館蔵

図③＝高島屋史料館蔵

図①

図②

図③